

News Letter of Sapporo Nature Research & Interpretation Office

調査館通信

27+28

2005.01-12.

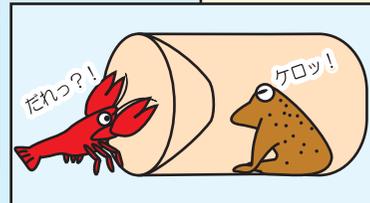
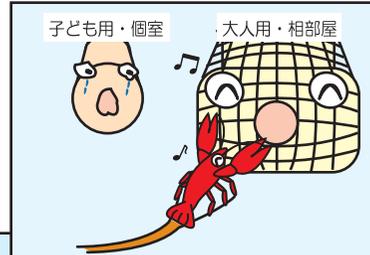
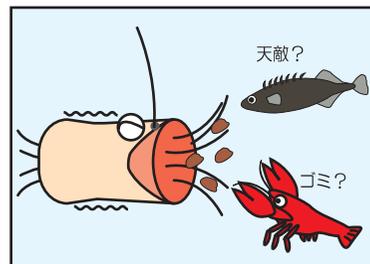
2006.01 発行

<http://www.cho.co.jp/>

制作・発行=さっぽろ自然調査館

新年年賀状号

- ◆〒004-0051 札幌市厚別区厚別中央1条7丁目1-45 山岸ビル3階
- ◆電話=011-(892)-5306 ファクス=011-(892)-5318
- ◆電子メール=cho-tusin@cho.co.jp / chosakan@cho.co.jp
- ◆郵便局払込口座=02740-2-58150 [(株)さっぽろ自然調査館]



●関東自然史博物館めぐりレポート
・その1(群馬編) → 16頁

●今月までの活動・ニュース
→ 26頁・裏表紙全部

今月までの活動・ニュース

年間報告スペシャル 2005

今回も前回から一年の間隔があいてしまいましたので、活動報告は年間報告です。いろいろな小ネタ・感想・コメントも含めた拡大スペシャルとしてお届けします。

1 月

●札幌市樹脂標本講座〔22日～〕

3年目を迎えた札幌市博物館活動センター主催の樹脂標本作製講座。調査館樹脂班が活動センターで作製の指導を行なった。子どもから大人まで26名の方が参加し、3週にわたって樹脂標本の製作に取り組んだ。参加者は自分の用意した昆虫や花の標本を処理して、思い思いのデザインで標本作製。過去の2回に比べると、こちらで用意した標本を使う人よりも、参加者が自分で標本を持参してくるほうがかなり多くなった。特に子どもは夏に飼っていたクワガタやカフトムシなど思い入れのある標本をもってきていて、自分の標本がちゃんと封入できるか心配しながら作業している光景も多く見られた。最終週には参加者がお互いの作品を紹介しあい、他の人の作った標本を感心しながら鑑賞した。参加者の方々は、樹脂標本の出来に満足そうに帰られたので何よりでした。

恒例化しつつあるこの行事、今年度も1月28日から毎週土曜日に3週にわたって開かれるので、興味のある方はぜひご参加ください（今回は定員が15名と少ないのでお早めに！詳しくは札幌市博物館活動センターまで）。（の）



調査館通信 27・28号(2006)

2 月

●滝野公園・森林体験プログラム「動物の痕跡さがし」19日〕

滝野公園の森林体験ゾーンにおける2004年度最後のプログラムが厳冬の中で行なわれた。晴天で動物の足跡探しにはなかなかのコンディション。参加者は10名ほどで、およそ3時間スノーシューをつけて歩きながら、足跡や冬芽などを探して観察した。滝野公園は周りを2m程度のフェンスに囲まれており、大型の哺乳類（ヒグマ・エゾシカ）は入れないようになっている（たまにフェンスのすき間から入ることもあり、9月には公園内にヒグマが入り込んで閉園になる騒ぎに）。今回見られた足跡は、キタキツネ・エゾリス・ユキウサギ・ネズミ類・イタチ類などで、狭い公園にも意外と多くの種類が生息していることを感じた。

滝野公園は滝が多くある地形からも想像されるように沢がとて深い。雪が積もるとどこでも自由に歩けようになるが、沢の部分では雪も深く傾斜もきついため、かなり身動きがとりにくい。今回も散策中に、沢に入ると皆で交代でラッセルしながら前進していくことに。厳しい寒さのなか、体を温めるよい運動となった。林内ではメスアカミドリシジミヤオ



オミドリシジミの卵を例年よりも容易に見つけることができたのだが、その後にはつ卵の当たり年だったことを聞いて納得。(の)

●釧路湿原自然再生協議会・全体構想確定へ〔22日〕

ほぼ1年前から策定が進められてきた釧路湿原の自然再生協議会における全体構想がようやく完成した。この日の協議会で最終に近い案を検討して了承された。12月から

のパブリックコメントでは、自然保護団体や研究者を中心にいろいろな意見が寄せられていたが、あまり構想には反映されず少々残念。まあでもボランティア？で関わってきた作業がひと段落してほっとしました。内容をご覧になりたい方は、<http://www.kushiro-wetland.jp/libs/>からダウンロードして下さい。また、冊子と概要版(デザインは私が製作しています)は調査館にも余部あるので見たい方はお問い合わせを。(お)



●アポイ岳再生委員会立ち上げ〔26日〕

前年12月にアポイ山荘で行なわれた準備会合(26号を参照)を受けて再生委員会の設立総会が開かれた。その名も、「カムバック1952アポイ岳再生委員会」(半世紀前の美しいアポイ岳を取り戻そうという意味)で、アポイ岳に関わる研究者と地元アポイファンクラブ、自治体などが、アポイ岳の高山植生の保全活動を協力して行なうことを目的として結成された。会長には渡辺定元氏が選ばれた。当日は、森林総研の永光さんと一緒に参加する予定だったが、直前にぎっくり腰になり欠席。EnVision・金子さんのご協力で、11月上旬に連絡手段として専用の電子会B-mail)が設定された。(に)

●さっぽろ市民カレッジ講座〔3日~〕

札幌市の生涯学習講座(いわゆる市民大学)の一つである「生き物たちとの共生を考えよう」の冬編(植物編)を担当した。この講座はずっとエコネットワークの小川さんが担当して、主に動物について講義を行なってきたものだが、今回は冬で植物をということで、小川さんから依頼されて調査館の登板となった。3月に全5回の講義(内1回は野外実習)ということで、講義を3人で分担し、実習は3人で久々に厚別の緑地について樹木の調査ということで実施した。講義の方は、キーワードとしては「札幌」「共生」「植物」ということで、今まで手がけてきた札幌の緑地の孤立した自然林の話を中心に、丹羽が訪花昆虫との関係から、展之が種子散布の関係から話をした。久しぶりのテーマなので、まとめをする良い機会と思ったが、120分という長尺の講義は、準備も喋るのもなかなか大変だった。

講義日は平日の夜(18:30-20:30)でなるべく多くの層に参加をしてもらいたいという設定だったようだが、実際には受講者はリタイア層が多かった(16名)。皆さん熱心で、終わったあとのアンケートでは「自然との共生について見えなかった」というようなお叱りもありました。小川さんの講義を期待している常連さんも多いのかなと思いましたが、たまには目先を変えて若者の生態学の話でも新鮮だったのではないかと(ちょっと心配)。(お)

●市民カレッジ講座・野外実習〔13日〕

市民カレッジの中に野外学習を1回設けて行なった。3月とはいえ積雪期なので、野外学習には必ずしも適した時期ではない。札幌市東部の厚別区の残存緑地を勉強の場を選び、市街地に囲まれた孤立林の生態系、地形と森林植生の関係、コナラを含む独特の森林などの話題で解

説した。またその後、1998～1999年に調査館で設定していた調査区を使って苗木調査などを体験した。数年間で樹木がどのくらい成長するかといったことがテーマだった。例年に比べてとても積雪が多く、当日も吹雪気味の天気だった。



(に)

●日本森林学会[27日～]

日本林学会改め森林学会（今年名称が変更された）の全国大会が北大で開かれた。道内では毎年支部会があるのだが、全国大会は北海道での開催は10年ぶり。調査館では釧路のカラマツ林で行なっている自然林再生の調査についてポスター発表した（タイトル「カラマツ人工林における広葉樹の侵入・更新様式」）。これと同様の研究は最近多く見られるが、今回は類似のものがあまりなかった。ただ、この分野のレビューをまとめている長池さん（山梨県森林総研、元日本自然保護協会）と学生時代以来久しぶりに会って話せたのでよかった。（お）

●東大雪講演会[27日]

上士幌町糠平で、「北海道の外来植物 - 種類相と生態」という演題で講演を行なった（環境省上士幌自然保護官事務所とひがし大雪博物館の共催）。前日のうちに糠平に入り、今回も川辺さん宅に寄宿させていただいた。外来種に関しては、外来生物法の施行や特定外来種の選定をめぐって国民的な関心を呼んでいる。北海道でも前年に「北海道ブルーリスト」（ブルーリストは希少種のレッドリストに掛けたもの）が出た。実際に大きな問題が出ているブラックバスやセイヨウオオマルハナバチなどの動物の陰に隠されて、植物は盛り上がりには欠ける面もある。講演では外来生物法の概要、北海道の外来

植物相、外来植物の生態、外来植物をめぐる問題について解説した。

午後は五の沢沿いの森林を、歩くスキーで散策しながら巨木探しを行なった。ミズナラとシナノキの巨木が多かったが、前年の台風による風倒木も目立った。

(に)

4月

●北海道植物友の会講演会[2日]

友の会総会に合わせて恒例の講演会が開かれた。演者は西川洋子さん（北海道環境科学研究センター）で、「春植物の開花戦略 - 複数の花をつける意味 - 」というタイトルで講演いただいた。キバナノアマナ・ニリンソウなど、身近な春の花が話題で親しみやすい。日ごろは分類学や生物地理学の視点で野草を見ることが多いが、生態学的な視点に加わると同じ植物でもちがってみえる。西川さんの研究は野外における詳細な観察と実験、酵素分析などからなっていて、とにかくち密さが際立っている。文一総合出版の『花生態学の最前線～美しさの進化的背景を探る～』に詳しいお話が載っている。

なお、6月に発行された会報「菩多尼訶」23号には、これまでフロウ情報の少なかった桧山地方の総合植物誌が掲載された（笈田、桂田、金上、黒田、高橋、与那覇の各氏による）。「まだまだ十分ではない」（金上さん）というものの、22回69日間で223地点にも及ぶ現地調査と標本に裏付けられた力作。（に）

●セイヨウオオマルハナバチ駆除シリーズ[29日～]

29日に野幌ふれあい交流館で東大鷲谷いづみ教授らによる講演があった。セイヨウオオマルハナバチの帰化が自然界に与える影響を解説するとともに、一般市民による捕獲・監視を呼びかけた。講義室に入り切らないほど盛況で、この手の講演には珍しく子どもづれの参加者が多かった。マルハナバチのぬいぐるみあり、

寸劇ありで、親子向けの工夫がなされていた。

5月28日、今度は恵庭市（茂漁川沿い）で実際にセイヨウを捕獲する催しが



開かれた。主催者は4月のときと同じ東大・鷺谷研で、大学院生のみなさんが中心となって捕獲の方法を指導してくれた。時期的にはちょうどセイヨウの女王蜂が活発に飛び回ることで、狭い範囲ながら6時間で255頭が目撃された。このうち154頭が捕獲された。また、在来種はエゾオオマル・エゾコマルなど49頭が目撃されただけだった（東大保全生態学研究室調べ）。西野のフォレスターズの宇野さんが「モスのはやにえ」になったセイヨウを見つけていた。…松村さんのメールにも写真あり（使用の場合は出典を書くように）

6月4日には、開拓記念館の学芸員である堀さんが中心になって、野幌周辺のセイヨウ探しを行なった。野幌周辺でも前年にセイヨウが確認されており、今後の増加が気になるところである。北大大学院生を中心としたパラタクソノミスト研究会会員が15名ほど参加した。このときはセイヨウは見つからなかったが、その後、4頭の女王蜂が捕獲されたという情報をもらった。今後は場所を決めて毎年同じ時期に観察を行なう、という話もある。個人的にも、5月3日、14日の両日、セイヨウ探しで野幌森林公園内を歩き回ってみたが、このときは確認なし。夏以降も見に行くつもりだったが、忙しくなってしまう、残念ながら行けなかった。

12月5日には一連の調査の報告書も届けられた。それによると、道内でのこの一年のセイヨウ目撃総数は実に5,007頭。特に多いのは石狩・胆振・日高にかけてだが、空知・上川・網走にかけてのライ

ンの多さも目立っている。逆にこの2年間全く見つかってないのは、檜山・留萌・根室だけだった。貴重な情報が集まっただけでなく、環境モニターを育てるということでも価値ある活動である。

12月7日には、ようやく、セイヨウを特定外来種に指定して家畜使用を規制できるようになるという話も聞こえてきた。（に）

5月

●札幌市貸し出し用樹脂標本セット作成[10日]

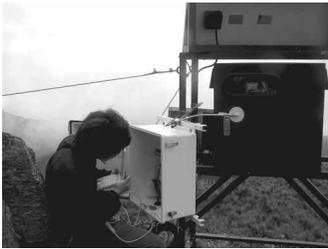
札幌市の博物館活動センターのための樹脂封入標本づくりは、4年間に渡って取り組んで来たが、2004年度で一区切りとなった。その最後の仕事として、展示用ではなく、貸し出し用のセットの作成を依頼された。「ミュージアムBox」と名づけられたこのシリーズは、樹脂標本をテーマに合わせてセットにし、学校の授業などに貸し出そうというもので、今回はテスト的に3テーマについて2セットずつを製作した。テーマは、今までの展示内容から、小中学生が札幌の自然を学ぶ上で適しているものを選んだ。「動物の成長を比べてみよう」「花に来る虫をしらべてみよう」「札幌で見られる木の実」の3テーマ。各セットは、樹脂標本のセットと、それを収めるケースと持ち運び用のかばん、解説テキスト（指導者向け）、標本配置用のパネルと展示用使い方パネルからなっている。こういう貸し出しキットはリクエストが今までもあって、一度つくって見たかったので良い機会になった。ケースやかばんの調達も自分たちで



やったので、その辺が実は大変だったりしましたが（特にGW中にケースを自作した展君）。<http://www.city.sapporo.jp/museum/museletter/no25/no25-4.html>に貸し出し要領が出ていますので、ぜひ借りてやって下さい。（お）

● アポイ岳調査登山〔24-25日〕

道環境研究センターの委託で、ファンクラブのみなさんと幌満コースから登山。昨年秋に設置した気象観測装置にたまった冬の間のデータを回収した。2005年の春は全般に雪解けや気温上昇が遅れ気味だったが、アポイも例外ではなく、春まだ浅い感じで花の種類もそれほど多くはなかった。配線ミスでデータが取れてなかったらどうしようなどと内心不安だったが、ちゃんとデータは記録されていた。しかし、風力計だけは見事に吹き飛んでしまっていた。（に）



6月

● たきかわ環境フォーラムのハンドブックづくり〔2日〕

滝川市で活動する市民団体から、財団の助成金が当たって市内の丸加高原の自然ガイドブックを作成するのでサポートしてほしい、という依頼が来た。丸加高原は郊外の丘陵地で、大規模な観光農園みたいなところだが、一部に落葉広葉樹の二次林があって散策路もある。打ち合わせて図鑑タイプにしたいということだったので、この日と8月18日の現地取材に同行し、種名が分からないという植



物を確認しながら歩いた。その後、構成を練ったり、原稿のチェック、写真の提供・記事の一部執筆もしたりして、11月末に完成した。（に）

● 西野はっばっばカーニバル〔11日〕

昨年10月に開催予定だったが悪天候のため中止になったイベント。今年度、再度企画しての実施となった。フォレストクラブの主催で、西野西公園に隣接する西野川の河川敷にいろんな団体が集まり、それぞれブースを設けて出し物を用意した。今回参加したのは、循環（くるくる）ネットワーク北海道／環境り・ふれんず／手仕事屋未然／路地裏芸を楽しむ会／手稲さと川探検隊／西野川を育てる会のみなさんと調査館で、スタッフ参加者総勢50人以上。生き物観察・堆肥作り・自然染料を使った染め物など自然をテーマにした出し物が、幅広く用意されていた。子どもは時間の許す限り好きなブースにいくつでも行くことができ、各団体が与えられスピーチタイムで懸命の売り込みを行なう。

調査館は、「森の生き物探検隊」のブースを担当し、西公園にすむ野ネズミの観察を行なった。エサに糸つけて持ち去りを調べたり、仕掛けたワナを確認して捕まったネズミを観察したりした（ちなみに西野の森に昨年設置した野ネズミ観察ハウスを利用したかったが、いまだネズミが利用してくれず断念）。他の生き物系ブースでは、手稲さと川探検隊が「川の生き物探検隊」ブースで、西野川に入ってカゲロウやトビケラを採集して観察。これが西野川の改修前の最後の川遊びとなった。改修後も同じように川虫が見られる川になることを願うが...

カーニバルの終わりは、紙芝居屋さんが昔ながらの紙芝居を上演し、黄金ハットの登場で子ども以上に大人の世代が盛り上がっていた。（の）

● 達古武調査スタート〔14日～〕

今年も3年目に入った釧路湿原達古武

地域での調査が始まる。今年は主に自然林再生のための実験を行なっているカラマツ林での追跡調査を行なう。また、この地区の動植物相を少し詳しく調べて、今後の自然学習プログラムの作成等に活用することにした。業務から始まる調査は、どうしても基礎的な調査、情報収集に欠けてしまい、今までの知識でカバーしてごまかしてしまうことがよくある。歩いて土地になじまないと人に教えるようなことは得られないので、今年は遠いながらも釧路には通うようにした。

また、具体的な展示作成の仕事として、シラルト口湖畔に環境省がつくるミニ展示に関わることになり、標本集めなどの準備もしていくことになった。（お）

7月

●達古武モニタリング開始[4日～]

釧路湿原再生事業の一つ、カラマツ林を自然林に再生する事業では、最適な方法を探るため各種の試験をしている。前年のうちに地がき、ササ刈り、間伐などを行ない、その後どんな樹木がどのくらい発芽したかを調べる。カラマツ林周辺には自然林があるので、人為的に地表処理をすることによっていろいろな樹木の実生が生えてくるに違いない。たくさん種類や数が侵入するような方法、でもできるだけ手をかけない、というルールで望ましい方法を今後選ぶ。

道東では、6月上旬～下旬に発芽する樹木が多い。7月に入ると林冠・林床とも繁ってくるので、体力のない実生からどんどん枯れていく。この年は春の始まりが遅れたため、実生の観察にはちょうどよいタイミングとなった。

数が多かったのはダケカンバだが、高さ5ミリ以下で探すのに骨が折れる。風散布型のダケカンバは、母樹林に近いほど多く、西斜面よりも東斜面に多い傾向があった。前年豊作のミズナラは期待された割には、とてもわずかだった。ミズキ・キハダ・ハリギリなどの鳥散布型は、

母樹林の距離とはあまり関係なく出現するようだった。（に）

●厚沢部町調査[14-16日]

北海学園大の佐藤教授の紹介で、厚沢部のヒバ林の植物調査を実施。地元の方や函館山の木村マサ子さんなどにも同行いただいた。道南は温帯植物が多いが、ヒバ林は全体が温帯植物のかたまりのようなものだった。ヒバ林は青森県などを中心に国内に点在する。いったいどのようにして、津軽海峡を挟んだ北海道に飛び地状に分布するようになったのだろうか。陸橋ができれば氷期に南方の植物群がまとまって北上するとは考えにくく、

そもそも水深の

深い

津軽

海峡

に

陸橋

が

でき

るか

どう

かも

怪

しい。

津

軽

海

峡

が

生

じ

る

前

の、

北

海

道

と

本

州

が

陸

続

き

だ

っ

た

時

代

の

名

残

（

遺

存

）

で

は

な

い

だ

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

ら

う

か

● キッズ・サイエンスパーク[4日]

北海道や札幌市、民間の20程度の研究機関（農業試験場とか北電など）が一同に介して、それぞれの機関が専門分野を主かして子ども向けの展示や実験コーナーを開いて、子どもに科学の面白さを知ってもらおうというイベント。サッポロファクトリーの大きな会場のなかで各機関がブースを受け持ち、それぞれ趣向をこらした展示が出展された。中には原子力関連の研究機関がスイカの糖度を計る体験コーナーで子どもにスイカ振舞っていて、研究と関係ないことで露骨にイメージアップを図ろうとしているところもあった。

今回は、札幌市博物館活動センターの出展のお手伝いで、主に樹脂標本展示コーナーを渡辺展と柴田が担当した。樹脂標本展示では、学校など一般貸出し用として製作したミュージアムBOXを使って来場者に標本を使って観察や体験してもらった。「動物の成長を比べる」「花に来る虫をしらべてよう」「札幌で見られる木の実」の3つのテーマを用意して、来場者には、実の形を見て運ぶ動物を当てるなど樹脂を使った遊び方を教えて体験してもらった。樹脂標本自体の珍しさやきれいさにひかれてくる人が多かったが、遊び方を覚えると夢中になって遊ぶ子ども多かった。

場所の良さや宣伝効果もあってか、予想以上に来場者が多く（1000人以上？）、始まりから終わりまで親子づれで大変な

賑わいだった。子ども達にとっては夏休みの自由研究の格好の材料となったのかもしれない。コンサドーレのドーレくんやフィタターズのマスコットBBも現れ、子どもたちにすぐに取り囲まれて人気者に。これだけの研究機関が集まって開かれるのに1日だけの開催というのは、もったない気もしたが、運営も厳しうしく、道の補助金頼みのためこのご時世だと来年の開催を危ぶむ声もあった。（の）

● 厚別東パソコンクラブ行事[8-12日]

札幌市厚別区では「まちづくり事業企画提案制度」を作って、地域住民の積極的な行政参加を促そうとしている（<http://www3.city.sapporo.jp/gyousaiji/kaiken/shiryou/20050412/atsubetsu.pdf>）。具体的には、行政では対応が難しい地域課題（福祉・環境など）を、住民の知恵や力を借りて解決しようというもの。この制度の特徴は、市民団体に「委託」という形をとること、企画自体を提案させるところである。必要に応じて環境アドバイザー制度などを使い、専門家を派遣してサポートさせることになっている。今回は「厚別東パソコンクラブ」（会長：佐藤克也氏）が受託した「小野津幌川の自然環境観察とその結果を元にしたパソコン教室」のサポートを行なうことになった。打ち合わせを重ねた結果、夏休み中に子ども向け観察会2回（+下見1回）、観察会後のワークショップ1回を行ない、それらに参加してサポートすることになった。学校への案内も行ったそうだが、申し込みが少なく、結



局2回とも小学生の参加者ゼロとなってしまった。パソコンクラブ会員だけとなってしまったが、なんとかワークショップまで執り行なった。(に)

● 洞爺湖森林調査指導[29-31日]

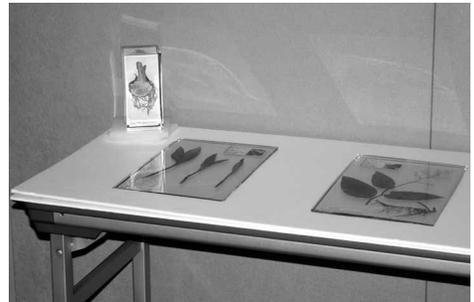
環境省が洞爺湖で行なうグリーンワーカー事業に関わっている、NPO法人「アースウィンド」の横須賀さんから頼まれて、湖畔の植物相調査を行なった。グリーンワーカー事業は、国立公園などで市民団体が行なうゴミ拾いなどの美化活動、登山道整備、倒木などの撤去、植林、希少野生生物の監視などの活動を金銭的にサポートするものである。今回の調査は、キャンプ場周辺など人目に付きやすい場所に生えている希少植物を把握して、盗掘監視や保全に役立つ基礎資料にするものである。また、自然ガイド業が盛んな洞爺湖では、利用しやすい形で自然情報を集積しておくことも重要である。意外にも洞爺湖周辺の植物相に関しては公表されたものが少なく、手薄である。調査には横須賀さんらも同行し、観察会形式で解説をまじえながら行なった。今後は湖畔林のミズナラなどの巨木さがしも予定されている。(に)



展示に使う標本として樹脂封入標本を香から製作していたので、それらの出来っぶりを見にいったのである。製作したのは古くから利用されてきた有用植物10種で、オオウバコリなら若い根茎、マムシグサなら秋の根茎と実など、利用部位に合わせて封入したのが特徴。多くは根茎を封入したが、いずれもなかなか見栄えが良いものだった。

特別展では入り口にも飾ってもらっていた。盗難が心配されるということで、机にはめ込まれたり固定式の台に取り付けられたりしているが、回転は出来るよう工夫がされている。

正直、展示としては、チセの再現模型などに負けている気はした。家建てるのは面白そうである。



知床の方は、現在「植物I」が刊行された「知床ライブラリ」シリーズの植物IIの原稿執筆の打ち合わせのため、急ながら担当の内田学芸員のところにお邪魔した。このシリーズ、道新との協働ではじめられた全十巻にも及ぶ意欲的なもので、知床でのさまざまな自然の研究の集大成になることが期待される。出版も大変なようで、2005年の世界遺産正式決定が追い風になるといいのだが。

知床は学生時代には年に何回も通い、森林調査から意識調査までさまざまなことに取り組んだフィールドだった。最近のご無沙汰であるが、今回の企画に少しでも関われるのはうれしいことである。ただ、久しぶりの網走で釧路以上に遠いことを実感しました。昔はよくヒッチハイクとかしていたけど、ようやっとったな～(お)

9月

● 北方民博の特別展、知床博物館訪問[2日]

8月末に釧路・達古武での調査を1週間行なったが、その後に北上し、網走・知床エリアに久々に向かった。目的は二つあり、一つは網走にある北方民族博物館の特別展「アイヌと北の植物民俗学」の見学。斉藤学芸員からの相談で、この

● 達古武カラマツ林調査会・母樹林・昆虫編〔17日〕

去年度に続いて、達古武のフィールドで、調査に市民にも参加してもらって調査会を2回開催した。「大人の事情」で開催時期が同じ秋になってしまったが、同じテーマではつまらないので、母樹林と昆虫の調査、タネ集めと苗づくりをテーマとした。特に調査だけでなく、実際に保全・再生に関わる活動も取り入れてみようということで、1回目は母樹の保護活動（エゾシカにかじられないようにアオタモなどの幹に網を巻く）、2回目は集めた広葉樹のタネで苗づくり活動を実践してみた。体を動かす作業は皆好きなので、割と好評だったようだ。

1回目は昨年度から引き続き、標茶高校の生徒さんたちが参加したので、20名近い参加者となった。内容は盛りだくさんで、自然林を再生していくときの一番の力となる母樹林にどんな木があるかという調査、母樹林とカラマツ林で昆虫にどんな違いがあるかを比較する調査を行った。昆虫調査は去年のネズミと違って、分かりやすい結果ではなかったが、簡単な方法で調査ができることはしてもらえたかと思う。保護作業の方は、ほとんどが「バットの木」アオタモ。樹皮がとてもよく食べられてしまう木だが、意外と丈夫で食われても生き続けている木が多い。それでも食べられ続けて死にそうな木もいたので、今回の保護で来年以降復活するか楽しみ。（お）



● 達古武・地元意見交換会〔28日〕

今年進められている「達古武地域自然再生実施計画」に関連して、達古武地域

の地元の方々と環境省との意見交換会が行なわれた。地元といってもここにある二つの町内会合わせても20世帯程度という小さな集落なので、集まった人も6名。しかし、自然再生が部分的に行なわれることへの懸念や、縦割り行政への批判などの意見が活発に聞かれた。森や川の昔の様子の話も聞けて、なかなか興味深かった。（お）

10月

● アポイ機器設置〔4-5日〕

昨年秋に設置した気象観測機器のうち、風力計が冬季の着氷と強風のため、破損してしまった。強風にも耐えうる機器に取り替えることになり、再度、機器を背負って登山した。今回は風力計のみのため、荷揚げ自体はかなり楽勝だった。昨年同様、アポイファンクラブのみなさんがサポートしてくれたおかげで、取り付け作業も無事完了できた。雨風の中、お疲れ様でした。（に）



● 花卉資源の採集〔12日～〕

3年目になる花き採集事業（北海道らしい花 資源の収集が目的）もいよいよ最終年となった。今年は低木類を主体に集めるという方針が決まる。亜高山帯などにも興味深い植物はあるが、採集許可などの問題もあるので今年も低地での収集に徹する。農業試験場つなかりで縁のある羊ヶ丘を収集地に決める。ミヤマガマズミ・アクシバ・ナツハゼなどを採集する。遅れていた紅葉もようやく美しくなってきた。（に）

●達古武カラマツ林調査会・タネ編〔15日〕

9月に引き続き2回目のカラマツ調査会には6名が参加。カラマツ林内にある母樹林がつくるタネの量の調査と、タネの採取と苗づくりを体験してもらった。キャンプ場集合で説明後にカラマツ林内へ。母樹林からの距離ごとに設置したシートトラップの中身を回収して、母樹林からの距離とタネの数の関係について調べた。前日の雨でトラップにタネがくっついてしまい取れにくくなっていたタネを回収。タネを持ち帰った後、種ごとにタネを数えて結果を整理した。今年はミズナラが不作でほとんどならず、ウダイカンバが豊作で、タネ数えは少々苦勞した。参加者の中には、初めて目にするウダイカンバのタネの小ささに感心する人もいた。

調査とあわせて、森を歩きながら広葉樹のタネを見つけては採取し、ミズナラのほかイタヤカエデ、サワシバ、アオダモなどのタネを高枝切りばさみで集めた。参加者は、普段気にして見ない樹木のタネに興味深く観察していた。キャンプ場に戻って、採ったタネを参加者で分けて、雪印種苗の鈴木さん・荒井さんの説明にしたがって、ポットに土を入れてドングリなどのタネを植え込んでいった。ポットは参加者に持ち帰って育ててもらい、数年後に育った苗を持ってきてもらい達古武のカラマツ林内に植える予定に。しっかり育てて戻ってきて欲しい。

昼食は、アークスの孫田さんによる芋煮料理が振舞われた。出身地の山形料理だそうで、冷えた体をあったかくしてくれ、みなおいしくいただく。天気はいつ雨がふってもおかしくない予報だったが、行事終了までもってくれた。雨が降り出したのはスタッフが後片付け終えて帰ろうとしたときで、今シーズンは修がいると釧路の調査で雨が降らないという晴男ぶりを発揮してくれた。（の）

●滝野公園森林体験プログラム—第1回森の小動物を知る—〔22日〕

昨年から引き続き、滝野公園で行なわ



れている体験プログラムを実施。森の手入れや木を使った工作を行なう活動系と生き物の調査体験を行なう調査系の2本立てで、調査館は調査系を担当。通年でのプログラムを目指していたが、諸事情により、木の葉も散り始める10月後半からのスタートに。季節が限られると、できるプログラムも限られる。この日は、森のネズミをテーマに様々な持ち去り実験から生態を観察する内容で行なった。今シーズンはドングリが不作だったこともあり、どんなエサを置いておいても、ほとんどの実が持ち去れる状況で、し好性について調べるはずだったが、今年はかりはネズミにとって選り好みしている場合ではないらしい。ドングリに糸をつけた持ち去り先を調べた実験でも、その場で食べられてしまったものが多かった。実施前の数日は雨が多くネズミがエサを食べにこなかったらと心配したが、しっかりと働いてくれた。（の）

●上野幌中学から会社見学〔27日〕

これも昨年に引き続き、中学校の総合学習の一環で、生徒の会社訪問の受け入れ。昨年は女の子3人組だったが、今年は中学3年生の男子1人。この総合学習、今年のテーマは自分が将来なりたい職業について調べたり、その関係の会社に訪問して体験したりするものらしい。昨年訪問した生徒はほとんどインタビューだったが、今年は体験もさせてほしいといった要望だったので、朝から夕方までいろいろと作業を体験してもらうことに。道中、調査館を選んだ理由を聞くと、大

学の先生になりたいがそういう場所は訪問リストに入っていないので、仕方なくここにしたとの答え。生き物への興味についてもあまりないといった感じであまりに身も蓋もない答えに少々戸惑う。さらに質問あったら何でも聞いてというといきなり「給料どのくらいですか」と聞かれて苦笑。

生徒の話の聞いていると、希望場所がなく先生にどこでもいいから行きなさいといわれて仕方なく来た感じ。年頃なのか口数も少なくやる気があるのかなのかいまいちつかめない。それでも、野外に出での作業（種子トラップの回収、昆虫のソーティング）は意外と積極的に取り組んでいた。受験勉強させる一方で将来の夢について調べる総合学習もさせるとは、自分の学生時代に比べて、学校からの押し付けが増している感じで、自分の時代以上に、今の中学生の不自由さを感じる。（の）

●滝野公園森林体験プログラム—タネ—〔29日〕

2週続けて滝野公園での調査プログラム。この日は先週のプログラムのとき時に皆で作って設置したシードトラップを回収し、中に入っているタネの数のカウントや観察を行なった。同様の諸事情により、10月下旬というタネなんか落ちてしまっているのではと思われそうな時期に、しかも1週間という短い設置期間で心配だったが、それも憂に終わった。細かいタネがたくさん入っていて、室内作業では、皆さん懸命にタネを数えることに。樹木のタネを普段ほとんど見ない参加者は、今回小さなイウダイカンバのタネが、しっかりと記憶に残ったようだった。

体験プログラムは現在8回のうちすでに5回が終了して残り3回。調査系は1月29日に実施するので、他のプログラムともども興味ある方は足を運んでみてください（詳しくはこちらを→http://www.arcs-inc.co.jp/takino05_051026/

p8m_01_08.html)。（の）

●北海道自然史研究会〔29-30日〕

道内の自然史学会芸員などの集まりである本会の研究発表会が、北大総合博物館で行なわれた。今回は北大の大原昌弘さんが幹事となり、21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」（COEプログラムとは、文部科学省が世界最高水準の大学作りのために必要と認め、重点的に支援を受けることができる総合研究のこ）の後援という形で開催された。

初日の午後に、公開シンポジウム「博物学と分類学—市民と社会の分類学への二ブー」が行なわれた。3名の演者がそれぞれ、分類技能検定の紹介（自然環境研究センター・久保田正秀さん）、調査業務などに携わる者が不満に感じる分類情報（丹羽）、分類学の最先端やパラタクソノミスト（分類学者に準ずる専門習得者）講座の紹介（大原さん）について講演し、質疑を受けながら議論した。夜は、懇親会・総会が開かれた。

二日目の午前には、大原さんの案内で北大総合博物館の〈裏側〉である収蔵庫をみせていただいた。世界中から集められた莫大な収蔵品を前にしたせいか、あまり声も出ない様子だった。一見ただけでは分からない、きめ細かい収蔵システムの説明に感心した。午後は6件の研究発表が行なわれた。（に）

11月

●藻岩山円山動物調査〔1日～〕

札幌市の博物館の業務で、藻岩山・円山の動物調査を実施。藻岩山・円山は国の天然記念物に指定されていて、札幌市の市街地に隣接した希少な原始林で市民にも親しまれている。生息種はこれまでも調べられているので、今回の動物調査では、都市との接点を考え、森と街とを行き来する動物たちや、森のエッジを利用する動物の生息状況について調べること。合わせて痕跡などの標本収集も行

なう。

最初に、森と住宅地の境界を中心に下見。円山は住宅地などに囲まれた孤立林で、藻岩山の西側は森が続いているが都市と隣接する東側は所々縺り抜かれたように住宅街が分布していて、どちらも天然記念物のすぐ横に家が建っているような状況。

こうした森のエッジでネズミの生育状況を調査すると、ほとんどの場所で森林性のネズミが生息しているのがわかる。これは、この辺りを含む札幌の西部の山の縁には、冬のエサとなるフルミの木が多いことと、地形的に岬のよう突き出た緑地は沢や尾根に沿った形で残っている

ことが多く、沢部が残っている場合にはネズミにとって良好な住環境も保たれているからと思われる。今後はいかに街と接する森にすむ動物が街との関わりを持ちながらくらしているか調べていけたらと思う。調査は今秋からのスタートで、来年度まで行なう予定。(の)



新年のご挨拶 2006年

渡辺 修

さっぽろ自然調査館の設立から9回目のお正月、会社としては6周年となりました。本年も、様々な面でさっぽろ自然調査館をよろしく願い致します。

今回もまたまた通信は、正月発行だけにとどまり、申し訳ない限りです。しかし久しぶりに記事を書けることができました。今後徐々に発行していきたいと思っておりますので、よろしく願いします。

スタッフは変わっておりませんが、以下に。

●役員

- ・渡辺 修
- ・丹羽真一
- ・渡辺展之

●社員

- ・宮原由実(今は育児のため休業中)

●2004年度臨時スタッフ

- ・松岡久美子(2001年度から断続的に)
- ・柴田 綾(2001年度から断続的に)
- ・野村昭英(2004年度)
- ・鈴木 有(2000年度から断続的に)
- ・大高洋平(2000年度から断続的に)



柴田さんとのこの
結希乃(ゆきの)ちゃん、
2歳7ヶ月

渡辺のとのこの
るい(るい)ちゃん、
1歳1ヶ月





●海外旅行記〔ドイツの旅4月〕

私が行ったのはドイツ南部で、私にとって人生初の海外渡航だった。ユダヤ人収容所などにも行ってみてドイツと日本の戦争観の大きな違いに感銘を受けたが、それ以外ではやはり自然環境に興味が奪われがちだった。

月並みながら、まず思ったのはドイツと北海道は植物相がとても似ているということ。ドイツトウヒやヨーロッパフナの森の林床には、春植物であるイチゲやスミシ、サクラソウの仲間が見事に咲いている（開花時期は北海道より1ヶ月ほど早い）。主要樹種であるカエデ・タモトウヒなど、種レベルでは違うようだが、属レベルでは共通性が高い。幹線道路や鉄道沿いには日本から行ったものと思われるイタドリ群落が目についた。それと、日本では石灰岩地の希少植物であるイチョウシダが古いコンクリート塀の割れ目などに生えていて、ちょっと驚いた。



セイヨウオオマルハナバチもあちこちでみかけた。市街地とその周辺に



多いが、「黒い森」では全く見ることはできなかった。日本のオオマルハナバチもほとんど開けた場所だけに棲むが、セイヨウもそういう性質が強いことを改めて感じた。それ以外の野生動物では、リス、ウサギ、シカ、イノシシの親子など短期だった割にはいろいろ見ることができた。



博物館にもいくつか行ってみた。小さなところはたいして運営をNPOらしき

ボランティア(老人が多い)がやっている。小額で解説もやってくれる。自然史博物館には大小1つずつ行ってみた。フランクフルトの国立博物館は化石や剥製が充実していて圧倒された。フライブルクの小さな博物館にはハチの紹介コーナーがあって、戸外とつながったミツバチの巣がアクリル板を通して見れるようになっていた。

今回まったくの個人ツアーだったため、四六時中、「言葉の壁」にぶつかった。もうちょっとできるようにならないと…。

(に)





札幌市・樹脂講座(1月)



滝野公園・プログラム(2月)



札幌市民カレッジ・大谷地(3月)



ひがし大雪・巨木探し(3月)



アポイ岳希少種調査(5月)



恵庭・セイヨウマルハナ調査(5月)



滝川・丸加高原(6月)



滝川・クマバツクバネソウ(6月)



釧路・植物相調査(7月)



釧路・実生調査(7月)



釧路・オオヤマオダマキ(7月)



厚沢部・植物調査会(7月)



厚沢部・ヒバの実生(7月)



厚沢部・オオミズアオ(7月)



厚沢部・キッコウハグマ(7月)



釧路・ネムロコウホネ(7月)



ユウパニコザクラ(7月)



ユウパニコザクラ(7月)



シラルトロ・オニノヤガラ(7月)



厚別東パソコンクラブ(8月)



厚別東・近自然?工法(8月)



厚別東・ミクリ(8月)



キッズサイエンスパーク(8月)



洞爺湖・森林調査(8月)



洞爺・ミヨウギシャジン(8月)



洞爺・ツチアケビ(8月)



長万部・クサギ(8月)



北方民博・特別展(9月)



北方民博・サイハイラン(9月)



北方民博・オオウバユリ(9月)



知床・カラフトニンジン(9月)



シラルトロ・ヤナギタウコギ(9月)



達古武・母樹保護作業(9月)



達古武・昆虫調査説明(9月)



達古武・住民意見交換会(9月)



様似・ヒダカミセバヤ(10月)



達古武・タネとり(10月)



達古武・タネの精選(10月)



滝野公園・ネズミ実験(10月)



頒価=500円